

◆「作文練習帳（高学年）」を使った日本語指導

日本の学校では、様々な「書く」指導が行われますが、日常会話が理解できても、作文を書くことを苦手としている子どもは少なくありません。JYL の子どもの日本語の力と、国語科での「書く」ことの指導の間には、大きな壁があります。学校では、行事の度ごとに作文を書く機会がありますが、原稿用紙を配布され、「遠足のことを書きましょう」のような大きなテーマを与えられても、JYL の子どもは何をどう書くのかが分かりません。そうした経験が積み重なり、書くことを拒否する子どももいます。子ども自身には、壁の越え方が分からないのです。

この「作文練習帳」は、日本語初期の子どもたちを対象とした作文の段階的な指導方法を提案するものです。みなさんの地域や学校の状況に合わせた教材作成の参考にさせていただけたら幸いです。

1. モデル文を読み、こうした場合日本語でどんなことばを使い、どう表現するかを知ります。

この「作文練習帳」のモデル文は、できるだけ複文を避け、易しい文型を使っています。

えんそく
みくらやま
い

5月7日は、遠足でした。 三倉山へ行きました。

じ
しゅっぱつ
ぶん
ある
い

学校を9時に出発しました。 30分、歩いて行きました。

みくらやま
こうえん
ちす

三倉山には、子ども公園がありました。 グループで、ウォークラリーをしました。 地図を見てポイントをさがしました。

2. モデル文についての質問に答えます。

質問とモデル文はできるだけ同じ文型にしてあります。日本語にまだ自信がなくても、質問について正しく文で答えることが可能です。

- ① 遠足は、いつでしたか。
 - ② どこへ行きましたか。
 - ③ グループで、何をしましたか。

3. 自分自身の体験についての質問に答えます。

「2」の活動で質問の答え方が理解できていますので、精神的な負担は少なくなっています。

あなたのことを書きましょう。

- ① 遠足はいつでしたか。
 - ② 学校を出発したのは、何時ですか。
 - ③ 歩いて行きましたか、バスや電車で行きましたか。

4. 「3」の答えをまとめて作文にします。

この方法では、日本語初期の子どもでも原稿用紙 1 枚程度の作文を書くことが可能で、書くことの自信につながります。しかし、この方法は文の構成を指導者が誘導しているというデメリットもあります。書き慣れてきたら、会話をしながら子ども自身に表現や構成を考えさせるなど、次のステップの指導を工夫して下さい。

制作者：築樋博子

発行：2012年1月